# 戦争が持つ残酷さ、悲惨さ、等々を風化させないために

毎年８月になると先の戦争の検証番組、また、戦争に翻弄された人たちの人間ドラマが放送されるが、自分は自分の中で戦争というものを風化させてはいけない、また、先の戦争で失われた尊い命を礎として今をこうして生きている者の努めのようにも思い、出来る限り関連番組を見るようにしている。

今年は北京オリンピックと重なったので関連番組を録り貯めしておいたが、オリンピックも終ったので録画をようやく全て見終えたが、今年は元兵士の証言ものが多かったように思う。

また、新聞書評で「アウシュビッツの沈黙－強制収容所とゲットーに囚われた人々の記憶－」が目に止まり購入していたが、この書籍もようやく読み終えた。

この本は、日本の映像監督たちが「ドイツ国内をはじめナチス占領地域に無数に建設された強制収容所のうすれかけた記憶を記録するため」に、１０年ほど前にヨーロッパ各地で取材して映像作品「夜と霧を越えて」を作ったようであるが、取材スタッフの一人が映像作品で収録し切れなかった証言を含めて「取材した声を書きおこした」、正に生の証言集禄として今年５月に出版された書籍であった。

内容が検証・解説ものより、筆舌に尽くしがたい惨劇、惨状から奇跡的に生き残った方々の証言ものは、胸に迫るものは他の比でないとつくづく感じた。

人はおぞましい過去を思い出したくないだろうに、取材インタビューに、ある証言者は「（わたしの）このインタビューが世界に公開されるのは大変喜ばしいことです。時が経つにつれ、ひとの記憶は薄れていくものですから。」と述べ、また、ある証言者は「頼まれれば、いつでも自分の経験を話します。何も語ることのできない死者たちを記憶しているそれはわたしの義務だと思うのです。」と述べている。

こうした証言の声に、今を生きる我々は積極的に耳を傾け目を留めていくことこそが、戦争というものが持つ残酷さ、非情さ、悲惨さ、等々を風化させない営みのように改めて思った。

阿部幸泰　　（2008 年 9 月 2 日　記）